特248
976

東亞建設と回教徒

〔海外文化資料 第一五輯〕

財團法人·日本文化中央聯盟

始

特248
976

大東亞建設と回教徒

〔海外文化資料第一五輯〕

目次

一、回教圏……（一）
二、民族を超越した力……（三）
三、大東亞共榮圏に於ける回教徒……（四）
　日本の回教徒——滿洲國の回教徒——中華民國の回教徒——蘭印の回教徒——フイリツピンの回教徒——インドの回教徒
四、惠まれた回教圏の資源……（一四）
五、回教國と日本との貿易……（一七）
六、我が南方貿易の重要性……（二一）
七、日本茶と回教徒……（二七）
八、大東亞建設に於ける回教徒の役割……（三〇）

大東亞建設と回教徒

一、回　教　圏

回教圏とは、世界における回教徒の分布區域である。

現在、全世界の回教徒は概ね三億五千萬乃至四億と謂はれてゐるが、その中獨立國を形成してゐるものは、人口の二〇パーセント約七千百三十萬である。

前回の世界大戰前、トルコは回教圏の中で唯一の獨立國であつたと謂つて差支ない。當時トルコ皇帝は回教の教皇を兼ねてゐたので、ドイツはトルコを味方にひきこめば、全回教徒が聖戰として教皇の下に馳せ參ずると見込みをたて、トルコを參戰せしめたが英佛側は聖戰でなくドイツの野心から出た戰であると宣傳し、一方、アラビヤ王のフセインに將來の獨立を約束して、トルコに反對させたのであつた。大戰後、トルコは一共和國と改變した。その他にサウディアラビヤ、イエーメン、エヂプト、

イラク、イラン、アフガニスタン、トランスヨルダン等の回教獨立國が出來た。また民族意識に目醒め絶えず蠢動してゐるものに、中央亞細亞のウズベク、カザック、タタール、アゼルバイジヤン、キリギス等のソ領共和國、支那邊疆地方、インドネシアある。また今回の大東亞戰爭が始まる前まで、半獨立國として西洋諸國の保護下にあつたものが、五パーセントある。これを國別に分けると、

元英國に屬したもの	九千五百六十萬人
佛國に屬するもの	二千六百二十萬人
伊國に屬するもの	五百五十萬人
元和蘭に屬したもの	六千萬人
スペインに屬するもの	七十萬人
蘇聯に屬するもの	二千六百萬人
支那邊疆地方に屬するもの	二千萬人

世界各地に少數民族として散在するもの　千六百萬人

回教徒の分布は、トルコ、アラビヤ、イラン、アフガニスタンを中心として、西はモロッコまでの赤道以北のアフリカ一帶は、人口の稠密さに於ては中心地と大差はない。更に北インド、中央アジアから北支に連り、北はバルカン、ロシヤから、南はマレイ、また蘭領印度、フイリッピンに及び、相當廣範圍な地域に亘つて回教民族が居住してゐるのである。

二、民族を超越した力

回教は單なる宗教ではなく政治及社會の實生活と不可分の關係に在る。回教徒は聖戰によつて領土をひろめていつたが、征服された地方の民族は直に回教徒になる。政教一致の宗教であるから、回教の支配を受ければ回教の信徒にならねば容れられないことになる。これは回教が一つには民族を超越した宗教であり、またその聖意で布教されて來た爲めであらう。

回教は今日まで一千三百餘年を經過して、尙、新しい宗教の生命を持つてゐる。考へ方によつては原始的な宗教と云へないこともないが、日に日に新しい生命が躍動して居ると云ひ得るのである。これは、回教が民族を超越した宗教であるが爲である。また、嚴格な戒律によつて宗教心を固め、そして持續させてゐる。幾度か戰ひ、幾度か敗れて來たけれども、回教の生命は生きてゐた。敗れたときは雌伏した。回教徒は雌伏時代が長かつたとも謂へよう。その三百年有餘の雌伏の中にあつても、宗教の生命は依然として息づいてゐたのである。

三、大東亞共榮圈に於ける回教徒

日本の回教徒　回教とは如何なる宗教であるかは、日本人の殆んど凡ては知らないであらう。それは今日まで回教または回教徒との交渉が極めて乏しかつたが爲である。

古代の文獻には、日本人が西域の文化を支那を通してうけ入れてゐたことが記錄さ

れてゐる。雅樂に大食調などがあるのはその影響である。大食（ターシー）とはアラビヤの支那名である。また、南北朝から足利時代にかけて、南洋方面に來たアラビヤ人と、我が國人と交渉があつたことは確實であるが、回教に關する接觸は殆んどなかつたやうである。その頃、楠葉入道西忍といふ日本婦人とアラビヤ人との間の混血兒がゐた。西忍は航海術に長じ、八十六歳の高齡で支那に渡つて貿易した。彼の父アラビヤ人は回教徒であつたといはれてゐるが、西忍は佛門に歸依して入道となつた。

日本にはどういふ回教民族が居住してゐるかと云へば、その大部分はトルコ・タタール系の民族である。これらの回教徒は、ソヴエット革命後、白系ロシア人として滿洲、支那及び我が國に亡命して來たもので凡そ六百名位に上るであらう。多くのものは羅紗の行商などをやつてゐて、日本の各地を渡り歩いてゐる。このほか、インド、アラビヤ、シリヤ等の回教徒もいくらか在留してゐる。

日本に回教が發達しなかつたため、日本人回教徒の禮拜堂などはなかつた。唯在留トルコ・タタール人の手によつて建てられた東京回教學校内の禮拜堂と、神戸在留回

教徒の醵金によつて昭和十年神戸に建てられた回教寺院の二つがあるばかりであつた。最近、我が國でも回教に對する認識が改められ、回教が東洋の宗教として重要なる役割を持つてゐることが明かになり、頓に回教對策が講ぜられて來た。昭和十三年五月十二日、東京の一角に瀟洒な回教寺院が日本人の喜捨によつて建立された。そして、平沼内閣のとき、回教を他の宗教と同樣の規定をもつて遇せらるべしと言明されたのである。新綠けぶる小田急沿線、代々木大山町にあるこの新回教寺院はトルコ式の建築樣式で、四角な本堂の上に圓蓋のドームが異國の匂を漂はせてゐる。東方に向つた入口の上には尖塔が、青空に高々と聳えてゐる。教祖マホメットの降誕祭にあたる五月十二日盛大な開堂式が擧行されたのである。そのとき、遙々イエーメン國から第二王子サイフ・ウル・イスラム・エル・ホサイン殿下、サウディ・アラビヤ國王御名代駐英公使ハフイズ・ワハバ・パシヤをはじめ、沙漠の風俗をした回教徒の代表が、この盛儀に參列し、大東京に映畫で見るやうな一風景を現出したのであつた。この賓客たちは單に開堂式參列ばかりが目的ではなかつた。大東亞建設に邁進する日本に、回教

を公認して貰ひ、日本と通商をはじめたいといふのが、その眞の目的であつたのだ。

世界の人種を清潔人種と不清潔人種との二つに分けてみると、日本人、アラビヤ人等は清潔人種で、歐羅巴人の如きは不清潔人種に屬する。日本人は昔から牛や豚、その他獸類の肉は殆んど食べなかつた。明治以後、歐洲の風潮が流れ込んで來てから、いろ〳〵の獸肉を食べるやうになつた。今でも田舍へ行くと獸肉類を食べない人がまだ相當ゐる。その點、回教徒と似かよつたところが日本人にあるわけで、將來日本が新しく亞細亞の諸民族と提携するには、回教民族が最も可能性があるのではないか。それには、回教徒と日本人が精神的に民族を超越して提携しなければならない。日本でも毎年の行事として、メッカ巡禮に日本人回教徒が派遣されるやうにでもなれば、回教國の國民性を知ることが出來、日本と回教徒とが急速に接近する一つの策でもある。

日本人で始めてメッカに巡禮した人は、山岡光太郎氏で、明治四十二年である。この後鈴木剛、郡正三、細川將、榎本桃太郎、山本太郎、故若林九滿、故植原愛算氏等

がメッカへ巡禮した。

滿洲國の回教徒　滿洲國にある回教徒の數は五十萬といはれ、或は二百萬から二百五十萬と推算されてゐる。

滿洲國へ回教が傳はつたのは、西紀一七四〇年頃からといはれ、漢人の商人、農民達の間に伍して入滿したもので、現在、滿洲にある回教寺院（清眞寺）の數は二千以上と云はれてゐる。

滿洲の回教徒の大半は東干族の子孫卽漢回で、宗派はスンニー派が多く、シーア派は絶無と云つてよい。一方、是等の漢回に對し、トルコ・タタールの回教徒が帝政ロシアの東漸、舊東支鐵道が開通した頃（一八九七年前後）に、滿洲國に移住し、海拉爾を中心とし、哈爾賓、滿洲里、奉天あたりに存在し、その數は一千三四百である。

滿洲の回教の發展に貢獻した人に、忠壯公左寶貴がある。清朝末期の勇將にして、日清の役にも猛將として勇名を馳せた。將軍は山東の出身で、滿洲に移り住んでからは、公共事業、慈善事業に相當の力をつくし、回教の信仰に篤かつた。現在奉天にあ

る同善堂といふ回教寺院は、彼が私財を投じて設立したものである。現滿洲國皇帝陛下の御從弟であられる傅侯氏も回教の信者で、前記の東京回教禮拜堂の開堂式には、滿洲國回教徒の代表として臨席された。

中華民國の回教徒　支那に於ける回教徒の數は、三千萬といはれ、五千萬といはれまた千五百萬ともいひ、人によつて種々異つてゐる。これは實地踏査が出來ないために、正確な數字を表はせないのである。

支那の人口を四億、回教徒の數を三千萬と見れば回教徒は支那の人口の凡そ十二分の一に當るのである。回教が支那へ傳來した歴史は、唐代の頃、海陸兩路から入り、海はアラビヤの商人（明代には天方國人と呼んだ）が、廣東、福州方面から傳へ、陸は大食人（タージー）（アラビヤ人）が回紇人（ウイーグル人）を通じて、甘肅、陝西方面に傳へたといはれてゐる。また雲南地方の回教徒は安南方面に上陸したアラビヤ遠征隊が次第に侵入し、そこに定住したものと謂はれてゐる。蒙古と回教徒は古代から緣があり、成吉思汗によつて幾度か征服されてゐる。その麾下に降つた回教徒は七十萬といはれ

太宗が成吉思汗の意思を繼いで支那を平定したときには、五百萬餘の回教徒が甘肅、陝西に止つてゐたと謂ふことである。その後、回教徒から重要官職に就くものも出て回教は大に勢力を張つたが、清朝に至つて、初めて回教に對して彈壓が加へられた。

中華民國になつてから、清朝の彈壓政策を改めて、これを逆用したが、後には回教徒を壓迫し、彈壓、懷柔の臨機應變の手段をとり、極力回教徒の蜂起を防止して來たのである。

支那にある回教徒の職業は、主として牛羊皮革類を業としてゐるものが多い。また支那本土には回教徒の宿屋、料理屋が多い。これは回教徒が食事その他に嚴重な戒律を守るため、異教徒の宿屋、飲食店に出入しないからである。

蘭印の回教徒　蘭領インドの全人口は凡そ六千萬といはれてゐるが、その中で回教徒は九割を占めてゐる。

こゝに回教が傳はつたのは、インドの回教徒が勢力を得た十二世紀から十三世紀の初めである。インドと東印度諸島とは昔から、政治的、經濟的に交通が頻繁であつ

た。十一世紀には早や回教徒の商人がマレイ半島やインドネシヤに來て、盛に商取引し十二世紀の末葉には、スマトラの北部に植民してゐた回教徒さへあつたといはれてゐる。

蘭印に回教が傳はつてから、王侯中にも回教に歸依するものが多く出て來たため、從來のインド教は次第に衰へていつた。けれども、インド教文化と回教は深く融合しインド教的色彩をもつて傳播していつた。

一五一八年、デメクといふ勇將が回教に歸依してサルタンの稱號を得、マヂヤパヒト帝國を滅して統一したが、間もなく內亂が起り、回教諸國は分立割據した。十六世紀になつて歐洲人が東洋に渡來して來るやうになり蘭印は殆ど全部回教徒の領土となつたのである。その頃の回教宗派はシーア派であつたが、十七世紀以後、アラビヤ人が移住するやうになつて正統派のスンニー派が、シーア派に對抗して傳へられた。また歐洲人の移住と共に、キリスト教が傳へられ、今日まで三百年の間、回教二派とキリスト教が政治的爭ひを繰返して來たが、回教徒は政治的に全く力を失つてしまつ

た。

フイリツピンの回教徒　フイリツピンの回教徒は、僅に五十二萬に過ぎず、甚だ弱少であるが、政治的には重要性を持つてゐる。

フイリツピンの回教徒は『モロ族』で、スペイン人がつけた名稱である。モロ族はフイリツピン人と人種的には相違しないが、宗教の相異がある。つまりフイリツピンの人口約一千二百三十萬の中、キリスト教徒が一千萬以上である爲、宗教的に兩者に相容れられないものが存在してゐるのである。

回教がフイリツピンに傳はつたのは、十三世紀の末葉で、十五世紀には、全島の沿岸や主要都市の大半は回教徒に屬したのであつた。スペインはフイリツピンを統治するために、キリスト教をもつてしたが、モロ族は屈從しなかつた。

一八九八年の米西戰爭の結果、米國がフイリツピンを領土としたが、同化し難いモロ族は、スールー群島を本據として其の傳統を固執し、如何に懷柔策が講ぜられようと、モロ族を同化させることは多難なものと見られてゐる。

インドの回教徒　インドは世界で最も多く回教徒の居住してゐる地方である。總人口約三億五千三百萬の内、インド教徒約二億四千萬、佛教徒約一千三百萬、キリスト教徒約六百萬、回教徒約七千八百萬で、回教徒はインド全人口の二十二パーセント以上を占め、世界全回教徒の五分の一に相當するのである。

回教徒がインドへ侵入した時期を二期に分けることが出來る。第一期は十世紀から十五世紀に亘るサラセンの侵入で、第二期は十四世紀末のチムールのインド侵略に端を發したモゴール帝國の建設である。モゴールとは蒙古の意である。

インドの回教徒は大部分スンニー派に屬するものであるが殆ど土着のインド教の影響をうけ、その六割は風俗習慣など特殊な點を除くの外インド教徒と同じである。けれども、兩者は今日まで對立を續けてゐる。それは宗教思想上の相違、祭儀上の相違の他、經濟的な原因では大多數貧民である回教徒と富めるインド教徒との間に經濟鬪爭が絶えない爲である。

この對立は有つても、兩教徒はインド獨立の旗の下に、手を握つて起ち上らうとい

ふ意志を持つて居るのである。

全世界に分布してゐる回教徒達は、既に迷夢から醒め、民族運動への第一歩を踏み出しつゝあることは、見逃すことの出來ない大きな事實である。

四、惠まれた回教圏の資源

回教諸國の資源と云へば、先づ天然資源である。アフガニスタン、イラン、イラク、トルコ、サウディアラビヤ、それからイエーメン、エジプトなどの獨立國は無盡藏の天然資源を有してゐると謂はれる。回教國といへば茫漠たる沙漠を聯想するが、沙漠ばかりの連續と考へては間違である。

一番豐富なものは鑛物資源で、次に農産物である。農産物で最も豐富なものは棉花で、トルコ、イランに多く産し、エジプトは世界的な棉花の産地として知られてゐる。これは綿製品の原料として重要な貿易資源となつてゐる。回教國は一般的に太陽の熱に惠まれてゐるため、農産に適してゐる。古代から回教民族の重要な生産資本は

豐饒な土地であつた。イエーメンの如きは、山頂から麓に至るまで悉く開墾されて、棉花、麻、藥草、コーヒー、果實などの多くを產し、また天然資源としては岩鹽が最も多く產し、政府の直營事業として、海外に輸出されてゐる。コーヒーでは有名なモカが產出される。

鑛物資源としては、金、銀、銅が多量に埋藏されて居り、石油の如きもイラン、イラク、トルコに尨大なる油田がある。この地方は世界有數の石油地帶になつてゐるが石油をはじめ、金、銀、銅の採掘權は、殆ど英國、佛國、米國の手におさめられてゐる狀態である。然し此の採掘權の許與に對しては、毎年多額の鑛區稅を賦課する。イランの如きは石油鑛區の特許料として三百萬弗位をとつてゐる。

かうした天然資源が國家の重要財源となり、國によつてはそれらの財源を國家の種種な社會施設、農業施設、軍事施設などに充當してゐるのである。そこで、各回教國では天然資源の開發を急ぎ、海外に技術員を派遣して養成しつゝある狀態で、實際に經濟的開發が出來たならば、世界の何處の國にも負けない資源國になるであらう。

この豐富な資源を有しながら、どうして回教諸國の產業が發展しなかつたか。回教の教義、戒律、または必然的に生じて來る風俗、習慣、規律によつて制限されてゐたが爲めである。また、發展の重大なる要素である資力に乏しいことに原因するものであらう。

回教徒の慣習として、今日でも敬虔な教徒間では、金利を好まず、銀行利子すら受取ることを潔よしとしない風習がある。これは回教の法制の中に、金融の禁止、卽ち利子の禁止が規定されてゐるために習慣化されて來たのである。そこで、回教國では銀行業、或はこれと同種の保險業などの如きものゝ發達は困難である。

回教國は宗教の國であつて、產業の國ではない。就中、商業、經濟の方面は最も不振であるが、その原因は前述の如く資本がなく、また、加工工業の不振のため商品を持たない爲である。彼等の職業とするところのものは、旅館であり、料理であり、運送業、屠殺業、伯樂、皮革業などで、小商人が多い。古代から隊商を組んで商取引に出かけてゆく歷史を見ても頷ける。彼等は祖先傳來の商才があり、その閃きがあるに

しても、伸ばすべき鵬翼、驥足は、自らの力では到底望むことは出來ない。内に固い信仰の力があり、根強いところがあるにしても、之れだけでは今日の時勢では許されないものがある。けれども、適當なる支持者を得るならば、彼等民族には充分甦生することの出來る可能性を藏してゐる。惠まれたる資源を利用することが出來れば、必然的に産業方面も發展してゆくことは疑ひないことである。

五、回教國と日本との貿易

産業資源の豐饒な回教諸國と我國との貿易狀態を述べることにしよう。

我が國と回教圏との貿易は、この大東亞戰爭前まで輸出入併せて凡そ十六億圓であつたが、その中に印度、エジプトを入れると、總額に於て二千萬圓程の輸入超過になつてゐる。南洋の回教國だけで云へば、昭和十二年の輸出二億七千萬圓、輸入二億二千萬圓に上つてゐる。イラク、トルコ等との貿易はあまり發達してゐないがエジプト、印度からは毎年相當の棉花を輸入してゐる有樣で、回教國と日本との間には非常に大きな額が動いてゐるわけである。ところが、日本と直接貿易をやつてゐる回教國は非常に尠ない。つまり華僑、印度人の商人、アラビヤ人の商人の仲介で行はれてゐる。殊に無條約のアラビヤ方面との貿易は印度人を通じて行はれてゐる狀態である。

日本の對外貿易で輸出超過國と輸入超過國とを區別して見ると、(滿洲支那を除く)ヨーロッパ、アメリカ等は日本の輸入超過國で、印度は輸出入相殺の國、日本の輸出超過國は南洋、アフガニスタン、イラン、アラビヤ、エジプト等であつた。これら輸出超過國に對する日本の輸出の重點は輕工業品で、その重なるものは綿絲布、雜貨、陶器、茶、生絲、藥劑等で、之れを持込めばその代償として土産の羊毛、皮革、棉花工業鹽が如何程でも回教國から積出されたのである。

次に、やゝ古いが昭和十二年度に於ける回教國との輸出入統計を見ると左の通りである。

	輸出	輸入
英領印度	二九九、三六七千圓	四四九、四八六千圓

支那	一七九、二五一	一四三、六三六	
蘭領印度	二〇〇、〇五一	一五三、四五〇	
埃及	三二、七七二	七四、一一八	
海峡植民地	六七、四三七	六七、七九六	
露領アジア	二三、八五一	三、九〇三	
イラク	二三、六四四	九、〇二八	
佛領モロッコ	一八、二八三	一、五一八	
アデン	一四、一七七	一、三五七	
アングロエジプシアンスダン	一五、八一一	五、八五八	
シリヤ	一九、二五〇	一、三八七	
イラン	二、六三〇	一、五八九	
パレスタイン	五、七四五	五七八	
アラビヤ	四、八二七	五四六	
土耳古	二、七五三	二、八一八	
佛領ソマリランド	五七二	一、〇五五	
英領マレイ	三、八六六	四七、七九五	
西領モロッコ	一四五	四	
アルジエリヤ	一、三七二	一、二五六	
リビヤ	一、七五一	—	
英領ボルネオ	一、〇四一	一八、七七六	
チユニス	四五〇	一、五六二	
伊領ソマリランド	—	二、六〇八	
エリトリヤ	六	一、八七九	

回教徒の文化程度から見た場合、日本製品は彼等に最も適當であり、また安價であるため、諸外國製品よりも一番需要が多いわけである。ところが、回教發祥の地アラビア地方は素より其の他の方面に於ても餘り發展しないのはどう云ふ譯であるかと云

へば、彼我交通の便否、相互認識の缺如、修交條約及通商協定の有無等種々の原因に依るものであるから、是等の原因の除かれるやうになれば、對回教國との貿易も次第に發展を遂ぐることゝなるであらう。

また、間接的に回教との貿易を阻害してゐる事實がある。それは日本商人の一部が商業道德心に缺けてゐるといふことや、彼等回教徒の生活程度が日々に向上してゐるといふことに對して無關心であるといふことである。在外的な原因としては支那華僑の仲介的進出、英國、和蘭、佛國等の經濟政策から來る防遏が擧げられる。

六、我が南方貿易の重要性

我が國の對外貿易中、對南洋貿易は非常に重要なる地位を占めてゐる。最近の統計によると、我が對外輸出總額中、對南洋輸出はその一割二分を占め、輸入總額に於ても亦一割を占めてゐる。

南洋は全世界中最も豐富な資源を藏してゐる。最近の工業原料の大部分は南洋より供給されてゐるので、今後の我が對外貿易市場として南洋は最も大なる役割をなすべく、殊に我が國は歐米諸國に比し地の利を占め、又民族的にも傳統的にも優越點を有してゐる。南洋の總人口一億一千六百萬の中、約九割五分は土著民族であり、その約六割は回教徒であるため、我が南洋貿易は卽ち對回教徒貿易と云ふも過言ではない。

こゝに謂ふ南洋とは外南洋のことで、佛領印度支那、馬來、蘭印及びフイリッピンを總稱したものである。西は印度洋、東は太平洋、北は支那海の間に位する島嶼は總面積三百七十萬三千平方粁で、我が內地の約十倍に當り、世界中で最も豐饒なる資源國である。

我が對南洋輸出貿易の顧客は、殆んど土著民族であるが、また南洋在住の華僑六百萬も亦我が商品の華客である。けれども、土著民の一億八百六十七萬の人口に對しては華僑の數は物の數でもないが、消費力はその數に比して遙かに大なるものがある。之は彼等が主として我が輸出貿易に對し、土著民との間の仲介者の立場にあるからである。ところで、假に土著民一人が一年間に我が商品を一圓宛消費するとしても、一

億八百六十七萬人の消費高は、一年に一億八百六十七萬圓の巨額に達するであらう。こゝに我が南洋輸出貿易の重要性がある。彼等は永遠にその邦土から離れない大衆であることを忘れてはならない。

ところで、南洋回教徒の日本に對する感情を記して見よう。回教徒に限らず、南洋土著民の一般が、日本を知り、日本を尊敬し、日本を憧憬するやうになつたのは、日露戰爭における日本の大勝利が機緣となつたのである。歐米人の横暴と壓制の下に數百年の間呻吟して來た彼等は、同じ亞細亞人の一小國日本が歐洲列强の一つたるロシヤに大捷した事實を眼前に見て、心ひそかに百萬の味方を得た如く雀躍したのである。そして、大なる期待の眼を日本に注いで來たのであつた。けれども、彼等の心中にはなほ一沫の不安があつた。それは『日本は果して自分等に對し、滿洲國に對すると同樣の助力を吝まないだらうか』と云ふことである。南洋諸民族の指導者階級、知識階級達の詐らざる告白であるのだ。

そこで、我が國は南洋との經濟的親善、提携に對して、能動的に積極的に溫い手を

差延べることが、延いては我が南洋貿易發展に貢獻する所以であらう。

對南洋貿易の仲介は殆ど華僑によつてなされてゐたが、大東亞戰爭前すでに邦人も仲介業に乘出し、實績を擧げつゝあつたが、資本が貧弱であるのと、金融機關を持たないために支那人、印度人、アラビヤ人や歐洲商人の手先き仲買程度以上には伸びることが出來ず土著民に對して利益を圖つてやるまでには發達してゐなかつた。加之、對外的な障害に遮切られるのである。之れは英國の搾取的資本主義が網の目の如く張り巡らされてゐるためで、そのために土著民（または廣く亞細亞諸邦の國民）達は豐饒な資源をもつてゐながら窮迫にあへいでゐたのである。亞細亞の特產物を安價に買收し、それを歐洲に運んで製品となし、その製品を原價の數十倍で再び亞細亞人に賣付けるといふ奸策を弄してゐたのである。また最近では產業開發といふ名目の下に辛辣な搾取を初めてゐた。こゝで考へねばならないことは、南洋が原料生產國であると謂ふことである。近代的組織の企業は殆ど歐米人の企業であるが何れの企業もその土地の土著民と直接間接に關聯をもつて居り、土着民の經濟を富ませることは彼等の購

買力を增す所以であつて、我が貿易發展のよすがともなるのである。

最後に、我が國の對外輸出入貿易に於ける南洋貿易の地位がどんな役割を演じてゐるか、過去數年間の統計を掲げて見よう。

	總輸出入貿易額	對南洋輸出入貿易額
	千圓	千圓
昭和七年	二、八四一、四五三	——
同八年	三、七七八、二六五	——
同九年	四、四五四、四五四	四五三、三七四
同十年	四、九七一、三〇九	四八七、九〇四
同十一年	五、四五六、六五七	五六五、〇四四
同十二年	六、九五八、五九五	七五九、二九三

我が總輸出入貿易に對し、對南洋貿易は一割以上の地位を占め、年額五億圓以上、七億圓以上に達してゐる。次に輸出入を別にした統計を掲げてみると、

	總輸出額	對南洋輸出額
	千圓	千圓
昭和七年	一、四〇九、九九二	一五九、一三八
同八年	一、八六一、〇四六	二四九、六一四
同九年	二、一七一、九二四	二八八、二三四
同十年	二、四九九、〇七三	二八六、三二七
同十一年	二、六九二、九七六	二九〇、二七一
同十二年	三、一七五、四一八	三八五、七〇〇

	總輸入額	南洋輸入額
	千圓	千圓
昭和九年	二、二八二、五三〇	一六五、一四〇
同十年	二、四七二、二三六	二〇一、五七七
同十一年	二、七六三、六八一	二七四、七七三
同十二年	三、七八三、一七七	三七三、五九三

七、日本茶と回教徒

アメリカ合衆國の獨立は、茶の課税からその革命の端を發したことを知らねばならぬ。春秋の筆法をもつてすれば『支那産の紅茶、アメリカ合衆國を獨立せしむ』といはねばならない。それはお茶だけの持つ偉力の片鱗なのである。と、茶物語の著者は、かう傳へてゐる。

茶が世界十六億人の飲料品となつてからは、大小の差こそあれ、各國人の臺所や應接間に缺くべからざる必需品として愛飲されてゐる。まだ、蒙古人や回教徒にとつては、一日も缺かすことの出來ない重要な役割を勤めて居り、その生活から茶を取去ると、忽ち闇の世界となつてしまふ程である。

回教徒は綠茶を非常に嗜み、特にアフリカ北部の一帶では豫想外の消費が行はれてゐる。喫茶の大體から云へば、紅茶は歐米の白色人種で、綠茶はアジア人によつて消費されてゐる。この地方が熱帶または亞熱帶であり、新鮮な野菜の不足と、アジア系

統に近い有色人種であるために、綠茶に傾いてゐるといふ外はない。モロッコの如きは綠茶一天張りである。エジプトは紅茶を賞味する。これは英國の植民地である關係から、英國系の紅茶を飲む。イランは綠茶、アフガニスタンも綠茶で、宗教上から禁酒の掟が守られてゐるので、綠茶の需要は相當額に達してゐる。ロシア國内には百數十種の雜多な民族が住んでゐるため、輸入する茶の種類も多いが、その回教圏に屬するところ、所謂トルキスタン地方では絶對に綠茶である。支那に屬してゐるが、ロシアの匂ひのする地方に新疆がある。此處も亦、有數な回教徒の居住地帶で、紅磚(こうはく)茶の需要が多い。何れにしても、回教徒と綠茶とは特別に深い關係がある。

我が國に於ける製茶は、これまであまり顧みられなかつた。何んとなれば、國内に於ける茶の生産高は一千三百萬貫であり、輸出金額も三千萬圓足らずだからである。業者百二十萬人の間でこそ重要産業と呼ばれて來たが、專門的の茶業地域狹く、また一年を通じての仕事でもない。輸出商品の列位から云つても、十數位といふところにあるので、雜貨などと同樣の扱ひを受け易かつた。安政年間の茶の輸出は四十萬斤で

生絲や絹絲と並んで貿易品の横綱格であつたが、今日、絹物とは全く桁はづれの距りを見せるに至つた。けれども、支那事變によつて、茶業は日支兩國間に於ける產業上、最も重大なる意義を持つに至つたのである。

綠茶の生產は日支兩國に限られて居り、印度その他熱帶地方の茶樹では良質の綠茶は出來ない。印度は紅茶の產地で、有名な「リプトン紅茶」の原產地である。今や茶業は日支兩國一元となり、その供給は統制せらるべき機運が動いて居るのである。綠茶は回教徒の生活には絕對的に必要品であるため、今後回教徒を通じて日本茶の世界的進出が成されることゝならう。

近年における回教國への茶輸出統計を揭げると、

	日本綠茶(ポンド)	支那茶(擔)
アラビヤ	一、四〇〇	—
イラク	三八、〇〇〇	—
エジプト	三〇六、八一八	二二三
トリポリ	一、八五四、六七三	三九三
アフガニスタン	一、三六二、五一五	—
アルゼリア	三〇八、三〇二	一八、一二九
チユニス	八〇、三六九	三、〇七〇
モロツコ	一五、三七五	八五、三五七
フイリツピン	二一、三二五	八八八
ソヴイエツト	六、一七〇、一〇八	—
インド	一、三六二、五一一	七、五四六

八、大東亞建設に於ける回教徒の役割

玆に、回教徒及び回教民族の如何なるものであるかゞ略了解されたことであらう。宗教、政治、經濟、軍事、社會その他一切の事象を回教の經典によつて統一し、これを以て回教の生活原理、治世の大訓となし、一朝機運到來せんか、忽ち宗徒として

の團結を結成して事に處するの氣慨をもつてゐるのである。この氣慨があればこそ、『明日の世界勢力』として、三億五千萬の回教民族が勃然と起ち上るときが必ずや到來するであらう。かつて、アラビヤの一角より起り、數十年ならずして、亞、歐、阿三大洲に跨る大國を建設し、絢爛たる大サラセン文化を築いたその事蹟を見ても、彼等の宗教精神の建設的なることが明かである。

從つて、我が國と彼等三億五千萬の回教民族との接觸は、大東亞建設の大使命達成に、如何に重大なる意義を有するものであるかは、聰明なる我が國民の既に理解し盡して居ることといふまでもないであらう。

（をはり）

438
193

日本文化中央聯盟　加盟團體及會員募集

◇加盟團體
理事會の承認を經ること

◇會員
普通會員　會費年額二圓以上を納付すること
正會員　會費年額十圓以上を納付すること
特別會員　會費年額五十圓以上を納付すること
終身會員　普通會員は十ケ年以上、正會員又は特別會員は五ケ年以上、會費を納付するか又は一時に完納した方は當該終身會員に推薦す

◇會員の特典
一、本聯盟所定の徽章を受く
二、本聯盟の各講演會、講習會に出席自由
三、本聯盟の發行する出版物の一種又は數種の配付を受く
四、理事會の決議を經て別に定むる特待遇を受く

昭和十七年四月三日印刷
昭和十七年四月五日發行

大東亞建設と回教徒

㊟定價金三十錢

東京市麴町區内幸町二丁目大阪ビル新館
財團法人日本文化中央聯盟
編輯兼發行人　田口章太

東京市京橋區湊町二丁目十六番地
印刷人　篠倉政一

東京市京橋區湊町二丁目十六番地
印刷所　第一印刷所
電話築地(55)三〇六〇番 三〇六一番

東京市麴町區内幸町二丁目一番地ノ三
大阪ビル新館・電話銀座(57)一一八七番
財團法人　日本文化中央聯盟
日本出版文化協會會員番號　二二二〇三四

東京市神田區淡路町二丁目九番地
發行所　日本出版配給株式會社

配給元

不許複製

終

海外文化資料

——(既　刊)——

第一輯　最近の獨逸
第二輯　米國の極東政策と軍備
第三輯　伊太利の新體制
第四輯　新しき盟邦ハンガリー
第五輯　正しい輿論とは
第六輯　タイ國を語る
第七輯　化　學　戰
第八輯　蘭印・佛印の文化
第九輯　回教の話
第十輯　スエズ運河
第十一輯　ナチスの國防學と國防教育
第十二輯　働く伊太利の婦人たち
第十三輯　近代印度の指導者スワミ・ビベカナンダ
第十四輯　日本の南方發展
第十五輯　大東亞建設と回教徒

各册　0.30

——(以下續刊)——

發行所　財團法人日本文化中央聯盟